

## 小児科診療 UP-to-DATE

2022年5月17日放送

## ワクチン忌避への細やかな対応

国立成育医療研究センター 感染症科  
 医長 庄司 健介

## ワクチン忌避とは何か

まず初めに、ワクチン忌避とは何か、ということから説明させていただきます。ワクチン忌避、英語ではワクチンヘジテンシーと言いますが、これは「ワクチンが利用可能な状況にあるにも関わらず、ワクチンに対する受け入れの遅れや、拒否をみとめる場合」と定義されています。ワクチン忌避は、接種を受けない（または受けられない）お子さんが、ワクチンで防ぐことができる病気、（これは英語の Vaccine preventable diseases の頭文字をとって VPD と言われますが）、この VPD に罹患してしまう危険性が上がるという個人の問題に加えて、予防接種率が低下することで、現在大きな流行がない VPD が増加するという、公衆衛生上の大きな問題につながります。

例えば、アメリカでは麻疹、風疹、ムンプスに対する MMR ワクチンの接種率が 5% 低下したことに伴い、2-11 歳の麻疹患者数が 3 倍に増加したと報告されています。世界保健機構は、2019 年に世界の国際保健上の 10 大脅威として、大気汚染や気候変動などの重大な問題と並んでワクチン忌避をあげていることから、ワクチン忌避がいかに重大な問題であると認識されているかがわかります。

## ワクチン忌避の理由は様々である

## 安全性

- 自閉症
- 添加物
- 突然死
- アレルギー
- 漠然と怖い

## 必要性

- 効果がない
- VPD は稀
- 自然にかかりたい

## 選択の自由

- 子供のことは自分が一番わかっている
- リスク > 利益
- 政府は信用できない

Countering Vaccine Hesitancy. *Pediatrics*. 2016;138:e20162146

## なぜワクチン忌避が起こるのか

では、なぜワクチン忌避が起こるのか、ということについて考えてみたいと思います。実はワクチン忌避は最近生じた問題ではなく、古くはジェンナーが種痘を開発した時代からあったとされています。ワクチン忌避に至る理由には様々なものがあり、最も一般的なものはワクチンの安全性に対する懸念です。他にも、ワクチンの効果や必要性に対する疑問、現代医療に対する不信任感、実際に罹患する方がより自然であるという信念、など様々な理由があります。

このようにワクチン忌避に至るには様々な理由がある、ということを理解することは非常に重要です。なぜなら、理由が様々である以上、それに対する対応は画一的なものでは上手くいかないことが予想され、個別に細やかな対応をする必要があることが明らかだからです。

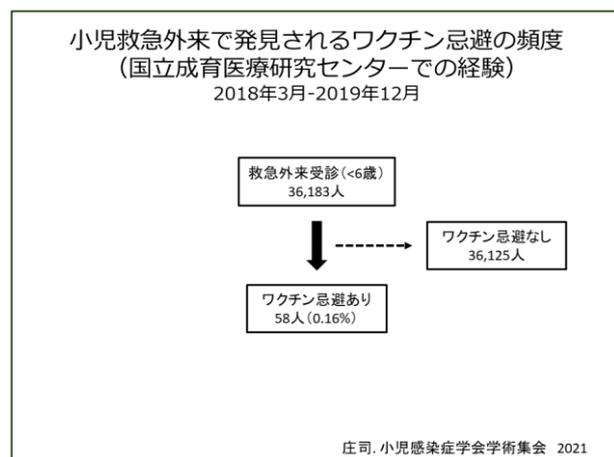
## ワクチン忌避の頻度

ここで、ワクチン忌避の頻度について考えてみたいと思いますが、これにはいくつかの報告があります。例えば米国で行われた6～23歳の子どもを持つ保護者に対して行われた電話調査では、おおよそ3%の保護者がすべてのワクチンを拒否しているという結果でした。

他にも米国のワシントン州での調査では、2013～2015年にかけて、子どもが生まれた時点では9.7%の保護者がワクチン忌避であったという報告もあります。

また、ヨーロッパからは約20%の保護者がワクチンに対して何らかの疑問を呈していたとの報告もあります。このように、調査の時期や、地域によってワクチン忌避の頻度は様々ではありますが、概ね数%程度の保護者がワクチン忌避、またはその傾向があると考えられ、決して稀な問題ではないことがわかります。

本邦におけるワクチン忌避の頻度については明らかではありませんが、我々が実施した調査では小児救急外来を受診した6才未満の患者のうち約0.2%でワクチン忌避があったという結果でした。諸外国の調査に比べれば少ないとはいえ、やはり本邦でも一定数のワクチン忌避が存在することは明らかと思われる。



## ワクチン忌避についてどのように対応したらよいのか

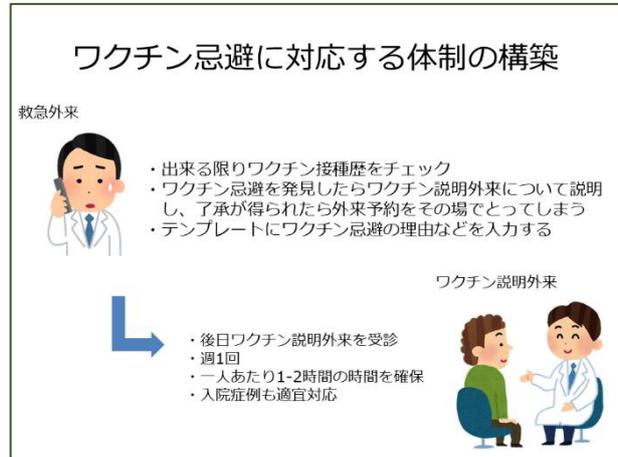
それでは次に、ワクチン忌避についてどのように対応したらよいのか、について考えてみたいと思います。まずは、いかにワクチン忌避を発見するか、ということですがこれには様々な方法が考えられます。

私の施設では、救急外来を受診したり、入院したりした際にはできる限り予防接種歴を確認するシステムになっています。これ以外にも、クリニックの一般外来や、健診時、教育や保育関連

施設への入園・入学時など予防接種歴をチェックする機会は多々あると思われます。重要なことは、ワクチン忌避が発見された場合に地域として対応するための場の提供だと考えられます。

本日のお話の後半でも述べますが、ワクチン忌避傾向のある保護者に対してお話をさせていただく場合、質疑応答まで含めると30分から1時間、時にはそれ以上の時間を要することもあります。これを普段の救急外来や一般外来で実施することは困難なので、ワクチン忌避に対応するための専用の外来など、ゆっくりとお話できる環境を整えておくことが何より重要であると考えられます。

私の施設では、救急外来、入院患者などでワクチン忌避が発見された場合は、専用の予防接種外来にご紹介いただき、そこで説明をさせていただくことにしています。



### どのように説明するか

では、次にどのような説明をさせていただいているかについて少し具体的に説明させていただきます。最初に述べたように、ワクチン忌避に至る理由が様々である以上、ワクチン忌避に対する説明も画一的なものでは上手くいかないことが予想されます。

そこで、我々の施設では、ワクチン忌避を発見した医師が、予防接種外来に紹介する際に、ワクチン忌避に至った理由など必要最低限の情報をテンプレートに入力することになっています。予防接種外来では、最初に15~20分くらいで予防接種の一般的なことについてスライドを用いて説明するのですが、担当医はテンプレートの入力内容を確認し、当日に用いるスライドの内容を修正します。例えば、予防接種によって自閉症になってしまうのではないかと、ということが主な心配という場合は、スライドの中に、ワクチン接種した子、していない子で自閉症の発生率にまったく差がなかったという報告の内容をのすライドを入れます。予防接種の効果に疑念があるという状況の場合には、例えばはHibワクチンが開始となってからいかにHib髄膜炎が減少したかというスライドや、本邦で水痘ワクチンが定期接種可されてからの水痘患者減少率を示したスライドなどを入れます。

また、VPDにかかっても大丈夫、自然にかかりたい、というような思ってる場合には、それぞれの疾患の合併症の頻度、例えばムンプスに罹ってしまうと難聴になりうることを説明します。高度な情報化社会となっている現代においては、保護者はインターネッ

予防接種普及前と現在の患者数の比較

疾患	20世紀の平均年間患者数	2016年の年間患者数	減少率 (%)
天然痘	29,005	0	100
ジフテリア	21,005	0	100
麻疹	530,217	85	>99
ムンプス	162,344	2,539	99
百日咳	200,752	15,737	92
ポリオ	16,316	0	100
風疹	47,745	1	>99
先天性風疹症候群	152	0	100
破傷風	580	28	98
インフルエンザ桿菌	20,000	30	>99

トなどを通じて様々な情報に容易にアクセスすることができます。

一方で、そこに氾濫している情報のどれが正しいのかを保護者が正確に見極めることは困難です。実際に我々の外来でも保護者から「どの情報を信じていいかわからなかった」と言われることはよくあります。一方で、ワクチン忌避傾向にある保護者が、ワクチンを受け入れる方向に働く最も大きな要因は小児科医からの情報提供であったという報告もあり、我々小児科医が適切な情報提供を行うことの重要性が示唆されています。

しかしながら、現在の医学部や卒後の医学教育のカリキュラムでは、予防接種に関して学ぶ機会は少なく、充分ではない現状があります。できるだけ多くの医療従事者が保護者に対して正確な情報提供ができるようになるために、医療従事者に対する予防接種教育の機会を確保することも重要な課題と考えられます。

また、ワクチンには接種後の発熱、痛み、稀ではありますがアナフィラキシーなどのデメリットがあることも事実です。予防接種の良い点だけでなく、デメリットについてもしっかりとお話をした上で、それでも接種のメリットが上回るのだ、というスタンスでお話をします。また、一見ワクチンのせいで起こったように見えても、必ずしもそうでないものも紛れ込んでいて、すなわち有害事象と副反応の違いについても説明するとよいと思います。

また、実際に説明をする時のこちらの態度として重要だと思うことは、保護者は、自分の子どもについて真剣に考えた結果、ワクチン忌避に至っているという背景をしっかりと理解することです。保護者の選択、姿勢を否定するのではなく、保護者の心配に理解を示し、何が子どもにとってベストな選択肢なのかを一緒に考えるというスタンスで臨むと共感が得られやすいと思います。また、ワクチン忌避の保護者は、それまでに受けた医療従事者や学校関係者などからの予防接種に関する指導やコメントを、子どもに接種を迫る脅迫のように感じ、精神的に傷ついていることも多いので、その点についても十分な配慮が必要だと思います。強い口調で説得するような姿勢ではなく、あくまで医学的に正しい情報を提供するというスタンスで話をするとよいと思います。

また、大変残念なことではありますが、信念として接種しない、させないことを決めている保護者に対しては、いかに丁寧に説明したとしても、その態度をワクチン接種の方向に向けさせる

### 予防接種のデメリット

有害事象	副反応
<ul style="list-style-type: none"><li>• 予防接種後に起こったすべての望ましくないこと</li><li>• 例: 予防接種を打った翌日に交通事故にあった。風邪を引いたなど</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>• 予防接種に関連して起こった望ましくないこと</li><li>• 例: 予防接種を打った部位が腫れた</li></ul>

有害事象  
副反応

実際には、ワクチンとは関連がないものも多く含まれている

### 介入すべきターゲット

問題なく接種させる

信念として接種させない

迷っている

この群をいかに発見し、介入につなげるかが重要

庄司, 小児感染症学会学術集会 2021

ことは難しく、そもそもこういった方々は外来までつなぐことができないことがほとんどです。この層に対してはかけた労力に見合うだけの成果を期待するのは難しく、諦めも肝心です。我々にできることは、ワクチン接種を迷っている層に対して十分なアプローチを行うことであり、この層については時間をかけて介入を行えば一定の効果が見込めると考えられます。

「小児科診療 UP-to-DATE」

<http://medical.radionikkei.jp/uptodate/>